

語彙的意味に基づく結束性について

—— 名詞の項構造との関連から ——

庵 功雄

【キーワード】代行指示、1項名詞、0項名詞、埋め草、語彙的結束性

【要旨】

代行指示の「この」と「その」の分布を考えるには名詞を「項」を持つ「1項名詞」とそれを持たない「0項名詞」に分ける必要がある。両者にはいくつかの統語的・意味的違いがある。また、代行指示は「単一文」と「非単一文」に分けて考察する必要がある。最後に、「1項名詞」という概念が日本語のテキストの結束性の体系の中でどのような位置を占めるものなのかを論じる。

0. はじめに

論者は先に「文脈指示」の中に結束性(cohesion)の観点から説明されるべきタイプが存在することを主張し(庵(1994a, 1994b))、「指定指示」*1)の「この」と「その」についてそれを論証した(庵(1994c, 1995a))。詳しい議論はそちらに譲るが、結論を簡潔に述べれば、指定指示の「この」と「その」は「テキストのトピックとの関連性」「テキストの意味の付与」という「テキストレベル」の概念に基づいて使い分けられている。つまり、この場合の結束性はテキストレベルのものである。一方、代行指示における「この」と「その」の使い分けは、名詞の語彙的特徴(項構造)が構造に反映した語彙・統語的な原理に基づくものである。本稿では、代行指示の「この」と「その」を考察することで、結

*1) 「指定指示」(林(1983))は(7)のように「この/その/φ+NP」全体で先行詞と照応しているものであり(φはそこに要素がないことを示す)、「代行指示」(林(1983))は(4)のように「この/その」の「こ/そ」の部分だけが先行詞と照応するものである(「この/その」がない場合も代行指示と見なす)。なお、代行指示の場合の「この/その」は「これの/それの」の意味である。

(7) 昨日生協でぎんざいを食べたが、その/この/φぎんざいはひどかった。

(4) 昨日生協でぎんざいを食べたが、その/この/φ味はひどかった。

束性研究の中での語彙的結束性(lexical cohesion)の位置づけを考えてみたい。

1. 先行研究

代行指示の「この」と「その」についての先行研究には林(1972, 1983)がある。前者は森鷗外の「高瀬舟」の中の「この」と「その」の全用例を、後者は夏目漱石の「夢十夜」における指示詞の全用例を挙げて分析したものである。後者の「先脈代行指示」を分析した部分で林氏は次のように述べている。

- (1) 「そ」が代行するものの後に相対関係を示すことばが来るといふ非常にはっきりした傾向が見られるのは、おもしろい。(林(1983:17))

実際、「夢十夜」の実例において代行指示の「その」の後に来ている名詞は「上、中、後、次、周囲、傍、(片)端、後、一つ、度、外、顔、口、幹」であり、これらは何らかの意味で相対性を持っている。また林(1983)のデータの中の「先脈代行指示」には「この」の例はない。これは極めて興味深い現象であるが、林(1983)はこの事実を指摘しているだけで原理的な説明を与えていない。

2. 問題となる現象

次の二文を考えて頂きたい。

- (2) 先日、先生が学会の会場でその著書に目を通しておられた。^{*2}

- (3) 先日、先生が学会の会場でその本に目を通しておられた。

(2)と(3)は下線部の名詞「著書」と「本」が異なるだけの最小対立対であるが、両者の間には次に挙げる三つの統語的/意味的な違いがある((2)が「代行指示」であるのに対し、(3)が「指定指示」であることにも注意されたい)。

第一の相違点は先行文脈の必要性である。即ち、(2)は始発文においても使うことができるが、(3)ではこれが不可能である。これは次のような談話から

も証明できる((注2)で挙げた文体上の問題は無視する)。なお、#はその文が先行発話と結束的にならないことを示す(cf. 庵(1995a))。

- (4) A: この間、学会の会場で先生がその著書に目を通しておられたよ。

B1: ああ、そうですか。/ B2: えっ、どの(著書)?

- (5) A: この間、学会の会場で先生がその本に目を通しておられたよ。

B1: #ああ、そうですか。/ B2: えっ、どの(本)?

つまり、「その著書」を含む(4)はそれだけで充足できるので、何の疑問も誘発せずに(4B1)のように談話を閉じることができるが、「その本」は先行文脈で言及されたものでなければならぬので^{*3}、先行文脈が存在しない始発文で(5A)が発せられた場合にはそれに対して(5B1)のように答えて談話を閉じることができず、必ず(5B2)のような疑問が誘発される((4A)に対しても(4B2)のように答えることは可能だが、(5)とは異なりこれは義務的ではない)。

第二の相違点は「この」との交換可能性である。

- (6) 先日、学会の会場で先生がその/*この著書に目を通しておられた。

- (7) 先日、生協で本を買って読んだ。その/この本は言語学の概説書でなかなか面白かった。

(6)の「その著書」は「この著書」に置き換えられないが、(7)の「その本」は(適切な文脈においては)「この本」と置き換えられる^{*4}。

第三の相違点は「その」の省略可能性である。

- (8) 先日、先生が学会の会場で著書に目を通しておられた。(=(2))

- (9) 先日、先生が学会の会場で本に目を通しておられた。

(8)は(2)と同義で「著書」は必ず「先生の著書」を指すのに対し、(9)の「本」は決して「先生の本」を意味せず「不定(indefinite)」の本を表す。

以上の点を図示すると次のようになる。

^{*2} (2)の「その」は翻訳的で許容しにくいという話者もいるが、次のような実例もあることから、その際の許容度の低さは文体上のものであり、統語レベルの文法性に由来するものではないことが分かる。

(9) 米屋の文芸者ノエル・バリンは、その/(*この)著書「鉄砲を捨てた日本人」のなかで、江戸時代以降の日本の鉄砲管理の歴史を、反戦平和につながるものだった、と肯定的にとらえた。(「AERA」1994.12.5)

^{*3} (5A)は現場指示としては適格だが、本稿では現場指示は考察対象としない。

^{*4} (7)のような文脈で「この」と「その」は「常に」交換可能なわけではなく、交換可能性にはいくつかの制約がある(cf. 庵(1995a))。問題は(6)ではどのような文脈においても「その」を「この」に置き換えることができない、つまり(6)は統語的制約であるということである(cf. 庵(1995b))。

(10)

	先行文脈が必須的	「この」と置き換え可能	「その」が省略可能
著書(代行指示)	×	×	○
本(指定指示)	○	○	×

3. 代行指示の諸相

3-1. 1項名詞と0項名詞

2. で見たように指定指示と代行指示は相補分布的な対立を示す。整理すると次のようになる。

- (I) a. 代行指示は単一文中で照応を閉じることができるが、指定指示ではこれは不可能である。
 b. 単一文中で充足する代行指示の「その」は「この」に置き換えられないが、指定指示の「その」は適当な文脈下では「この」に置き換えられる。
 c. 代行指示の場合「その」の有無で意味の違いは生じないが、指定指示の「その/この」を省略すると「不定」になってしまう。

こうした現象を説明するために、本稿では次のような提案をする。

- (II) 名詞の中には、必須項を取るものとそれを取らないものがある。前者を「1項名詞」、後者を「0項名詞」と称する。^{*5}

ここで言う「必須項」は寺村(1982)の「必須補語」、仁田(1993)の「共演成分」に相当する概念である。次の例を考えて頂きたい。

- (11) A: 昨日久しぶりに著書を読んだよ。

^{*5} 本稿の「1項名詞」には「破壊」「研究」等の派生名詞も含まれる。これらは項を二つ取るので「1項名詞」という用語は不適切で、厳密には「有項名詞」とすべきである(同様に「0項名詞」も「無項名詞」とすべきである)が、発音上の問題から本稿では「1項名詞」「0項名詞」という語を用いる。

- B1: #ああそうですか。 B2: えっ、誰の/#どんな?^{*6}

- (12) A: 昨日街で知り合いの作者を見かけたよ。

- B1: #ああそうですか。 B2: えっ、何の/#どんな?

- (13) A: 昨日久しぶりに本を読んだよ。

- B1: #ああそうですか。 B2: えっ、誰の/#どんな?^{*7}

- (14) A: 昨日街で知り合いの作家を見かけたよ。

- B: #ああそうですか。

- (15) A: 昨日読んだよ。

- B1: #ああそうですか。 B2: えっ、何を?

聞き手に何の前提もない始発文で(11A)(12A)を発するとそれに(11B1)(12B1)のように答えて談話を閉じることとはできず、必ず(11B2)(12B2)のような疑問を誘発する。これは始発文で(15A)を用いると(15B2)のような疑問が誘発されると同様の現象であり、このことから「著書」や「作者」は各々「誰の」「何の」を必須項として取る^{*8}ことが分かる。以上をまとめると次のようになる。

^{*6} (11B2)(12B2)では「どんな」は使えない。原則的に第一発話で1項名詞を含む文が発せられた時それは「どんな」を誘発しない。これは「どんな」は名詞の属性を尋ねるものであり、属性を尋ねることは指示対象が確定している名詞に対してのみ可能である(従って(13B2)では「どんな」が誘発される)と考えることで説明できる。

^{*7} (11B2)(13B2)では共に「誰の」が使われているが、前者の「誰の」が名詞の「項」に対応するものであるのに対し、後者の「誰の」は(1)の「長髪の」と同様の「付加語(adjunct)」だと考えられる。

(1) A: 昨日テレビ局で長髪の作家に会ったよ。

B: #ああそうですか。

(*) A: 昨日テレビ局で長髪の作者に会ったよ。

B1: #ああそうですか。 B2: えっ、何の?

(*) から分かるように一般に1項名詞に付加語がついても項は依然として不足したままである。

^{*8} ただし(1)のような「総称文」や(*)のような「所有」を表す文ではノ格が必要でなくなる。

(1) 妹は姉の言うことを黙って聞くものだ。

(*) 太郎には妹が2人いる。

これは、前者の場合は総称文の持つクラス指示性のため関係を表示する必要がなくなるためで、後者の場合は名詞が非指示的に使われているためである。

(Ⅲ) 「そうですかテスト」

AとBの対話の話し始めて話し手AがφN(Nは名詞)を含む文を発した時、協調的な聞き手Bが「ああそうですか」(に相当する表現)で答えて談話を閉じることができる時、その名詞Nは「0項名詞」であり、そのように答えることができず、必ず「Xの?」(Xは疑問詞)という疑問を誘発する時^{*9}、Nは「1項名詞」である。

3-1-1. 1項名詞とその類似概念

上で見た「1項名詞」という概念は仁田(1977)の「不定時を基準とする相対的時名詞」という概念に示唆を受けたものである。仁田(1977)は(16)が「始發文」でも使えるのに対し、(17)には「何らかの前置文脈」を必要するということを指摘し、その理由を「後日」(「不定時を基準とする相対的時名詞」)はその内部に「不定」部分を内包しているが、「昨日」(「発話時を基準点とする相対的時名詞」)の基準点は発話時に固定されているためであるとしている。本稿の「1項名詞」はこの「不定時を基準とする相対的時名詞」という概念を全ての名詞に拡張したものである。ここで重要なのは、仁田(1977)が名詞が連文的機能を持っていると考えていることである。これは後に見るように最も真実な意味での「語彙的結束性」である。仁田(1977)の「不定時を基準とする相対的時名詞」(及び本稿の「1項名詞」)は、こうした連文論的機能を射程に含んでいる点で、奥津(1974)、寺村(1977)の「相対名詞」や、西山(1990, 1993)の「非飽和名詞句」から区別される。

(16) 昨日私は大阪へ行った。

(17) 後日私は大阪へ行った。

^{*9} ここで誘発される「Xの?」のXの範疇は(1項)名詞の範疇の意味から決まっている。例えば、「前日」(時名詞)は「いつの」、「結果」(コ上名詞)は「何の」、「正面」(場所名詞)は「何の/どこ」等である。ただし「著者」(人名詞)は「何の」、「著書」(物名詞)は「誰の」になる。これは個別に辞書に登録することも可能だが、「著者/著書」という名詞を構成する形態素間の意味関係から予測可能である。即ち「著」は「書き手」と「書かれるもの」を必要とするが、「著者」の時はその中の「書き手」が話の内部に現れているので「書かれるもの」が「項」になり、「著書」の時はその逆ということである。

次に「1項名詞」に類似する概念として、奥津(1974)、寺村(1977)らの言う「相対名詞」を見る。結論から言えば、1項名詞は相対名詞を包含する概念であり、全ての相対名詞は1項名詞であるが、1項名詞の中には相対名詞でないものもある、ということになる。

例えば、「上」は相対名詞であるので、(18a)で「私たちが勉強シテイル」のは「上」ではなく「下」になる(寺村(1977))。

(18)a. 私たちが勉強シテイル上デ誰かが柔道ノ練習ヲシテイタ。

(寺村(1977))

b. その上で私たちが勉強していた。

一方、「犯人」は1項名詞だが(cf. (Ⅲ))、次のような分布を示す。

(19)a. 次郎を殺した犯人が捕まった。

b. その犯人が次郎を殺した。

(20)a. 次郎を殺した男が捕まった。

b. その男が次郎を殺した。

まず、(19a)の「犯人」は「次郎を殺した」人物と同一である。この点で、「犯人」は「上」などの相対名詞とは異なり、(20a)の「男」と類似性を示す。しかし、(20b)が(20a)に対応する文であるのに対し、(19b)の「その犯人」は第一義的には他の事件の犯人である。この点では「犯人」は相対名詞と同様の振舞いを見せる(cf. (18b))。つまり、「1項名詞」の中には「相対名詞」との類似性は持つもののそれとは独立したものがあるのである。しかも、「1項名詞」は(純粹に語彙・統語的概念であるので)「破壊」「美しさ」等の「派生名詞」も含む。従って、「1項名詞」は「相対名詞」とは別概念である。

次に同じく「1項名詞」と類似したものである西山(1990, 1993)の「非飽和名詞句」という概念との比較を行う。結論を先取りして述べると、「1項名詞」と「非飽和名詞句」とは外延的に等価になり得るものであるが、西山(1990)の規定はそのためには不十分である、ということである。

西山(1990)は「優勝者」「建築者」「委員長」のように「パラミター」の値が決まらない限り指示対象が決まらない名詞句を「非飽和名詞句」、そうでないものを「飽和名詞句」と呼び、Nが非飽和名詞句であるときに限り、「YがXのNだ」から「XはYがNだ」を派生させることができるとしている。例

えば「優勝者」は非飽和名詞句であるから、(21a)から(21b)を派生できるのに対し、「男の子」は飽和名詞句なので(22a)から(22b)を派生させることはできないとする(西山(1990:174-175))。

(21)a. 太郎が、あの時の優勝者だった。

b. あの時は、太郎が優勝者だった。

(22)a. 太郎が、あの時の男の子だった。

b. ?あの時は、太郎が男の子だった。

(21b)(22b)の文法性の違いから西山(1990)の議論は一定の説得性を持つ。しかし、次のような問題点が指摘できる。

その問題点は「パラミター」の規定が曖昧なことに由来する。例えば、西山(1990)では(上述のように)「あの時」を「優勝者」のパラミターとしている。さらに次のように述べている(西山(1990:176。下線論者))。

(IV) 指定文「Yが、XのZだ」において、「XのZ」が述語名詞句であるとき、Zが非飽和名詞句で、Xがそのパラミターの要素を表すときにかぎり、「Xは、YがZだ」を派生することができる。

(IV)を逆に読むと「「Xは、YがZだ」が派生できるのはXがZのパラミターである時に限られる」ということになる(この関係が成り立たないと(21b)と(22b)の違いが説明できない)が、そうすると、次のような例が問題になる。

(23)a. 山口百恵があの頃のアイドル歌手だった。

b. あの頃は山口百恵がアイドル歌手だった。

(24)A: 昨日テレビ局の前でアイドル歌手を見かけたよ。

B: ああそうですか。

即ち、(23a)から(23b)が派生できるから「あの頃」は「アイドル歌手」の「パラミター」になるはずだが、(24)から分かるようにこれは「1項名詞」で

はない^{*10}し、西山(1990)の立場からしてもこれは「非飽和名詞句」ではないと推察される(もし「アイドル歌手」が「非飽和名詞句」であるなら、「非飽和名詞句」と「1項名詞」は独立の概念ということになる)。しかし、するとXがZのパラミターでない時でも「Yが、XのZだ」から「Xは、YがZだ」が派生できることになり、(IV)が成り立たなくなってしまう。

こうした問題が生じるのは(IV)の下線部の主張が強すぎるためである。つまり、「Yが、XのZだ」から「Xは、YがZだ」が派生できるための条件を「純粹に意味論」(西山(1990:181))的な問題とするのには無理があるのであり、この構文の成立には「X」と「YがZだ」の間に叙述(predication)関係が成り立つか否かという運用論的(pragmatic)要因も関与しているのである^{*11}。

西山(1990)の「非飽和名詞句」には上述のような問題点が指摘できるが、この概念と本稿の「1項名詞」は外延的には等価なものであり得る。ただし、そのためには「パラミター」の認定基準を明確化する必要がある。つまり、「パラミター」は複数存在するのか、存在する場合に仁田(1993)の「共演成分」「付加成分」に相当する区別があるのか等の点を明確にする必要がある。

^{*10} 西山(1990)の「飽和-非飽和」の区別は一次的には意味論的なものであり、本稿の「0項-1項」の区別は語彙・統語的なものであることに注意されたい。

(ク) あの時は、太郎が優勝者だった。(=(21b))

(ク)a. #あの時はその優勝者が高価な商品をもたらした。

b. あのコンテストはその優勝者が高価な商品をもたらしたので有名だ。

つまり、(ク)の文法性を理由に「あの時」を「優勝者」の「パラミター」と見なすことがたとえ可能であっても、(クa)は始発文では不適格であるのに対し、(クb)は始発文でも適格であるから、「優勝者」が「項」として取るのは「あの時」(時名詞)ではなく、「あのコンテスト」(物名詞)であるのである。

^{*11} この構文に運用論的要因が関与しているのは次のような例からも分かる。

(コ) ?MITは僕の友人が言語学の教授だ。(←僕の友人がMITの言語学の教授だ)

(ク) MITはチョムスキーが言語学の教授だ。(←チョムスキーがMITの言語学の教授だ)

(シ) *この雑誌は、太郎によく読まれている。

(ス) この雑誌は、10代の若者によく読まれている。((シ)(ス)は益岡(1987))

「言語学の教授」は「看護婦/医師」などと同様の「飽和名詞句」であり、そのため(コ)の座りは悪いが、(ク)は容認可能であろう。これは(シ)と(ス)の關係に類似する運用論的な問題だと考えられる(cf. 益岡(1987:188ff.))。

もしパラ미터が1つしか存在せず「優勝者」の場合それが「あの時」であるのなら、(注10)の(7)のように「項」である「物名詞」ではなく、そうでない「時名詞」がパラ미터になってしまうので「非飽和名詞句」と「1項名詞」は一致し得ない(ただし、この場合、「アイドル歌手」を「非飽和名詞句」と考えない限り、(N)が成り立たなくなる)。一方、パラ미터が複数存在するのなら、「時名詞」も「物名詞」も「優勝者」のパラ미터になり得るので、一般に「パラ미터」の内の一つが「項」と対応すると考えれば、「非飽和名詞句」と「1項名詞」は外延的に等価になり得る(ただし、「項」は語彙・統語的概念なので(派生名詞を除いて)1つしか存在し得ないが、「パラ미터」は意味論的概念であるから複数存在することが可能である、という違いはある)。

3-2. 現象の説明

ここで、先に(I)で挙げた現象に対する説明を行う。

- (I)a. 代行指示は単一文中で照応を閉じることができるが、指定指示ではこれは不可能である。
- b. 単一文中で充足する代行指示の「その」は「この」に置き換えられないが、指定指示の「その」は適当な文脈下では「この」に置き換えられる。
- c. 代行指示の場合「その」の有無で意味の違いは生じないが、指定指示の「その/この」を省略すると「不定」になってしまう。

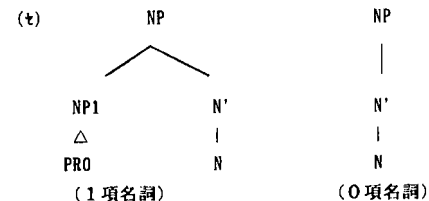
まず(Ia)から始めよう。代行指示では1項名詞が使われるが、1項名詞は項を持っており、その値が決まらなければならない。つまり、1項名詞は結合のための「手」(結合価)を持っているので、その値を決めるために同一文中の要素と結びつく(照応する)ことができる。これに対し、0項名詞にはそうした

「手」はないので同一文中で照応することはできないのである*12。

次に(Ic)に移る。先に1項名詞は結合のための「手」を持っていると述べた。これを換言すれば名詞句の構造自体が結束性を保証しているのである。このことから代行指示で用いられる「その」(厳密には「そのの」の「それ」)は意味的には「空」であり、その名詞が項を持っていることをマークする機能だけを持つ埋め草(filler)だと考えられる(cf. Halliday & Hasan(1976))*13。もしこの考察が正しいとすれば、代行指示の場合に「その」の有無が意味の差をもたらさないという事実は自動的に説明される。なお0項名詞は(注12)の(t)から分かるようにNP1(指定部)を持たないので、限定詞が省略されても「不定」の完全名詞句として機能できるのである。

最後に(Ib)だが、これは(Ic)の考察と関連している。つまり、日本語の埋め草については次の事実が観察される。

*12 これは構造的には次のようになると思われる。1項名詞、0項名詞(が文中で名詞句として用いられた時)の構造は各々次のようになる。この図で「手」に相当するのがNP1である。



*13 この位置の「その」が翻訳調で嫌われるのは「(曖昧さが存在しない限り)代名詞を避けよ」(Chomsky(1981:65))という原則から説明できるかもしれない(安達太郎氏の御示唆による)。

(V) コ系統には(原則的に)埋め草の用法はない^{*14}。

(注14)で見たように、(V)の原則は主題化構文以外の全ての埋め草において成り立つ。一方、(Ic)より(単一文中的)代行指示の「その」は埋め草である。従って、この場合の「その」は「この」に置き換えることはできないのである。一方、指定指示の「この」や「その」は話し手/書き手が「テキスト内で、先行詞を「どのように捉えているか」を標示するマーカー」(庵(1994c))であるから、先行詞の捉え方によって潜在的には交替可能なのである。

3-3. 非単一文の場合

これまでは「単一文」^{*15}の代行指示を考察してきた。その結果、この環境では「その」の有無は意味の差をもたらさないが「この」は使えないことが分かった。しかし、代行指示には次のような「非単一文」の場合もあり、その場合には「この」が使えることがある。ここではこのケースについて考察する。

- (25) 八九年、当時のゴルバチョフ・ソ連大統領は、郵電局の傘下にある、民生通信を、株式会社に移行させた。この(/その/の)結果、各共和

^{*14} 「原則的に」というのは主題化文では「これ」が現れるからである。

(7) 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これ(/*それ)を保持しない。

(「日本国憲法」第九条第二項)

一方、以下の例が示すように主題化以外の構文には埋め草のコ系統はない。

(8) 自分がそこ(/*ここ)に住む家(山本周五郎「プールのある家」)

(9) 本局も、中原の残り時間二時間十二分に対して、郷田のそれ(/*これ)は十一分だった。

(週刊将棋1992.7.1)

(7) 奨学金がないと研究はおろか生活それ/*これ自体が成り立たない。

この差は主題化の場合には埋め草が格を持っているのに対し、それ以外の場合には格を持っていないことによるものと思われる。

^{*15} ここでは単一「文」と述べているが、統語論的にこの現象に関与的なのはテンスを越える照応が否かということであるらしい。次例を考えて頂きたい。

(7) この調査はまだその/*この結果の分析が終わっていない。

(8) 先日調査をやったんだが、その/この結果を見たら君もきっと驚くよ。

単一テンス内の照応である(7)では「この」は使えないが、テンスの外に照応範囲が及んでいる(8)では「この」も使用可能である。つまり、非単一テンス内照応であることが、代行指示で「この」が使えるための必要条件である。

国や自治州の電話局が独立し、旧ソ連内には数百もの民間電話会社が生れた。(AERA 1993.5.25)

- (26) 永らく続いてきたドル高・円安の基調が、ようやく転機を迎えた。この(/その/の)理由は、おもに米国側にある。22日には米国の呼び掛けで先進5カ国蔵相・中央銀行総裁会議がニューヨークで開かれ、ドル安が世界経済にとって望ましいことを確認し合った。

(朝日新聞朝刊1985.9.26)

(25)(26)では実例として「この」が使われているが、「その」「ゼロ」も使用可能である(後者の特徴は「単一文」の場合と同様)。ここで重要なのは「この」が使えるということであり、これは「単一文」の場合と著しい対照をなす。

(25)(26)の場合先行詞は「文」である。一般に、先行詞が文である場合には「この」が使えるようである。これに対して、先行詞が「人/もの」の場合には少し事情が複雑である。次例を考えていただきたい。

- (27) 僕が愛読している雑誌があって、堅いことで有名なんだけど、今度この/その/の表紙になんとヌード写真が使われることになったんだ。

- (28) 太郎は明るい性格でみんなの人気者だが、??(a)この/(b)その/(c)の弟は乱暴者で町内の鼻つまみだ。

(27)は先行詞が「もの」の場合で「この」は使用可能だが、(28)は先行詞が「人」でありこの場合は「この」は使いにくい。いずれの場合も「その」「ゼロ」が使えるのは先行詞が「文」(及び「単一文」)の場合と同様である。

これらを統一的に説明するにはどうすればよいか。まず、「この」が使えるということからこの環境の「この」(の中の「こ」)は埋め草ではないということが言える。コ系統には原則的に埋め草の用法はないからである。

ここで代行指示における限定詞の問題を今一度一般的に論じてみたい。

(VI) α . [s ... NP₁ ... X_れ]のNP₂... (単一文の場合)

β 1. [s₁ ...]₁. [s₂ ... Y_れ]のNP₂... (非単一文:先行詞が文)

β 2. [s₁ ... NP₁ ...]₁. [s₂ ... Y_れ]のNP₂... (非単一文:先行詞が文以外)

(ただし、NP₂は1項名詞で、「X_れ/Y_れ」は通常表層では「X₀/Y₀」に縮約する)

ここで「X_れ/Y_れ」を満たし得るものには次の4つの可能性がある。

- (VII) A1: 埋め草の「それ」(代用=テキストの意味の付与/トピックとの関連性なし)
 A2: 非埋め草の「それ」(指示=テキストの意味の付与^{*16}あり)
 B1: 埋め草の「これ」(代用=テキストの意味の付与/トピックとの関連性なし)
 B2: 非埋め草の「これ」(指示=トピックとの関連性あり)

A1~B2の内、B1の「埋め草の「これ」」は全文脈において使えない(cf. (V)).
 次に(VIα)の「Xれ」を満たし得るのはA1に限られる。これは同一文中の要素を「指示」的に捉えることはできないと考えることで説明できる(cf. 3-2節).
 一方、(VIβ1,2)の「Yれ」は(統語論的には)B1以外の3つのどれによっても満たされ得る。ではなぜ(28a)のような「この(<これの))」が使えない例はあるのに、「その(<そのの))」が使えない例はないのかという点が問題になる。この問題について考えるため次のことを仮定する。

- (VII) 1項名詞の指定部をソ系統で埋める時のデフォルトの選択肢は「埋め草の「それ」」である。

つまり、本稿では(VI)の「Yれ」が「それ」である時それが(VII)のA1, A2のいずれに解釈されるかは解釈レベルの問題であり^{*17}、統語的には(1項名詞の)

^{*16} 「指示(reference)」と「代用(substitution)」については庵(1995b)を参照して頂きたいが、概略的には「先行文脈での累積した特定情報を引き継ぐ役割」(天野(1993))があるのが「指示」、ないのが「代用」と考えて頂きたい。

^{*17} これに対し天野(1993)は(VIβ1,2)の「その」は常に「先行文脈での累積した特定情報を引き継ぐ」としているが、すると次のような例が問題となる。

(+) 田中[角栄]の政治支配は、田中のバラまき金を受け取り、田中を政治的に支えた田中派と呼ばれる政治集団なしには存在しえなかったのだから、彼らも、日本の政治をかくも腐敗させたことに対する政治責任を共有しているはずである。

自民党員でもない5億円の取崩しが、政権党たる自民党を外から支配し、キングメーカーとなって、総理大臣の首のすげかえをやっていたという、あの恐るべき政治的倒錯の時代を作ったことに対して、旧田中派の人々は政治的連帯責任を負っているはずである。

今こそ旧田中派の人々は、その責任を明らかにすることを持って、角栄的なものを日本の政治から最終的に葬る第一歩としてほしい。

(立花隆「旧田中派は反省と自己批判をせよ」朝日新聞朝刊1993.12.17)

この例の「その責任」は先行文脈から情報を引き継いでいる読みもあるが、そうした引き継ぎのない読みもある(「その」を「自分達の/自らの」に置き換えられるのは後者の読みに限られることにも注意されたい)。従って天野(1993)の主張は現象の説明としては強すぎるのである。

「構造標示」のためにA1の「埋め草の「それ」」が挿入されると考えておく。
 すると、(28)の「この」と「その」の許容度の違いは次のように説明できる。
 まず、「その(>そのの))」の「それ」は埋め草なので先行詞の性質によらず非単一文の「その」は文法的である(もし、埋め草の「それ」が(運用論的制約のために)「人」を指せないとする(29)のような例が説明できなくなる)。従って、(28b)の「その」は先行詞が「人」だが文法的になる。

(29) 太郎とその家族

一方、(30a)は文法的なのに(30b)の許容度が低いことから、これは「この太郎の>これの>この」という派生過程で「これ」(レ系指示詞)で「人」を承けることによる運用論的問題(cf. 近藤(1992))であると考えられる。

- (30)a. 太郎は明るい性格でみんなの人気者だが、この太郎の弟は乱暴者で町内の鼻つまみだ。
 b. 太郎は明るい性格でみんなの人気者だが、??この弟は乱暴者で町内の鼻つまみだ。(=(28a))

4. 結束性理論の中の1項名詞の位置づけ

本稿では「代行指示」を考察してきた。その中で「1項名詞」という概念の有用性を論じた。ここではこの「1項名詞」という概念が結束性理論の中で占める位置について少し考えてみたい。

結束性(つながり)と語の意味との関連という点に関して取り上げなければならないのは林(1973)とHalliday & Hasan(1976)である。用語は異なるが、両者とも「語彙的結束性」というものを取り上げている。例えば、林(1973:140)は「語の意味に承前要素が托されている」場合を考察し、そこに11の類型を立てている。その中には「相対的位置関係を表す語句」のように本稿の1項名詞と対応するものもあるが、「類義性の語句」のように対応しないものもある。

林(1973:148)は次の2文間に「語句の類義性」によるつながりがあるとする。

- (31) (a)スクーターやオートバイもとおりました。(b)やさいをつんだオート三りん車がガソリンスタンドにはいつて来ました。

確かに(31)の「スクーター」「オートバイ」と「オート三りん車」の間には「語句の類義性」はある。そしてそれによって(31a)と(31b)の間には何らかの

つながりはある。しかしそれが「文法的」なものかという点に疑問の余地がある。つまり(31b)はそれ自体の中にその解釈を先行文脈に依存する要素は一切存在しない。かつ「定」を表す「は」も存在しない。従って(31b)には文法的結束装置は存在しないと見るべきであり、ここに見られる「つながり」は文法レベルの「結束性(cohesion)」ではなく、その上位に位置する「一貫性(coherence)」であると考えられる(両者の区別についてはWiddowson(1978)を参照されたい)。

一方(32b)も非省略文だがここには1項名詞の作る文法的「結束性」がある。

(32) (a) 先日ある本を読んだ。(b) 僕は前から著者/作家の言動に興味を持っていた。

つまり「著者」は必ず「何の」を要求し、そのために先行文(32a)と結びつくことができるが、項を持たない「作家」の場合には(その本を書いた人が作家であるというのは十分想定できることであるにも関わらず)その語の意味だけで先行文と結びつくことは不可能なのである(この場合、(32b)には「著者」以外のいかなる結束装置も存在しないことに注意されたい)。

なお、Halliday & Hasan(1976)でも「類義語(synonym)」「上位語(super-ordinate)」などが語彙的結束性を作るとされているが、彼らも認めているようにこれらの場合、定情報名詞句(テキスト内で二度目以降に言及された名詞句)は通常定冠詞を伴う^{*18}ので、英語の場合には「語彙的結束性」はそれだけで独立した結束装置とはなり得ない。一方、日本語では(32)のように名詞の語彙的意味のみに基づき「文法的」結束性を保証することが可能である。これは限定詞が統語範疇であるか否かの差に帰着する現象である(cf. 庵(1994b))。

以上のように考えると日本語で「語彙的結束性」と呼べるのは本稿で扱った「1項名詞」だけであるということになる(cf. 仁田(1977))。

5. おわりに

本稿では名詞の語彙的意味が結束性とどう関係するかを考察するために「代行指示」の「この」「その」「ゼロ」の使い分けを論じた。その結果、単一文では「この」は使えず、非単一文でも先行詞が人の時には「この」は使いにくい、「その」「ゼロ」は基本的に常に使えることが分かった。さらに、代行指示ができるのは「1項名詞」に限られること、及び「1項名詞」という概念のみが最も真正な意味での「語彙的結束性」の機能を担えるということを見た。

なお、本稿で扱った「代行指示」と類似したものに益岡(1979)や天野(1991)の言う「間接関与構文」がある。次例を見られたい。

- (33) a. 太郎は先生に著書をほめられて喜んだ。
b. 太郎は先生に本をほめられて喜んだ。
c. ??太郎は先生に学術書をほめられて喜んだ。

(34) 先日、太郎が学会の会場で本を読んでいた。

この構文では下線部の名詞と主語の関係性が強く、(34)では不可能である「本」⇒「太郎の本」の解釈が強制される。しかし、(33c)の「学術書」の場合は(太郎が学術書を書いたという状況は容易に想定できるものであるにも関わらず)表現として座りが悪い。つまりこの構文では当該の名詞が主語とどのように関連性を持てるかという意味論的な問題が重要なのである。このようにこの構文は興味深い現象を他にも示すが、紙幅の関係上その詳しい考察は別項に譲らざるを得ない(なおその一部は庵(1993)において述べた)。

【参考文献】

- 天野みどり(1991)「経験の間接関与表現」「日本語の「が」イと他動性」くろしお出版
 ——— (1993)「文脈照応「その」の名詞句解釈に果たす役割」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
 庵 功雄(1993)「語彙的意味に基づく結束性について」1993年度言語学会秋期大会発表要旨
 ——— (1994a)「結束性の観点から見た文脈指示」『日本学報』13 大阪大学文学部日本学科
 ——— (1994b)「定性に関する一考察」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座
 ——— (1994c)「この」と「その」の文脈指示用法の研究」第17回関西言語学会ワークショップ発表資料
 ——— (1995a)「テキストの意味の付与について」『日本学報』14 大阪大学文学部日本学科
 ——— (1995b)「指示と代用」ms.

^{*18} 上位語を用いた語彙的結束性の場合には次例のように「この」が必須である。

(二) 私はビールが好きだ。この/その/飲物は疲れを癒してくれる。

これは韓国語でも見られる現象であり(庵(1994b))、この環境では語彙的意味のみに基づく結束性は不可能で結束性を保証する要素(庵(1994b)では「機能的定冠詞」と呼んだ)が必要である、というのは言語普遍的現象かもしれない。

- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店
- 近藤泰弘(1992)「レ系指示詞の意味論的性格」『文化言語学』三省堂
- 寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味—その2—」『日本語・日本文化』5 大阪外国語大学留学生別科
- (1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『慶応大学言語文化研究所紀要』22
- (1993)「「NP1のNP2」と「NP2 of NP1」」『日本語学』12-11
- 仁田義雄(1977)「「文の文法」から「文を超える文法」へ」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社
- (1993)『日本語の格を求めて』『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 林 四郎(1972)「指示代名詞『この』『その』の働きとその前後関係」『電子計算機による国語研究Ⅳ』国立国語研究所
- (1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- (1983)『代名詞が指すもの、その指し方』『朝倉日本語講座五運用Ⅰ』朝倉書店
- 益岡隆志(1979)「日本語の経験的間接関与構文と英語のhave構文について」『英語と日本語と』くろしお出版
- (1987)『命題の文法』くろしお出版
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on nominalization" Reprinted in Chomsky (1972)
- (1972) *Studies on semantics in generative grammar*, Mouton
- (1981) *Lectures in Government and Binding*, Mouton de gruyter
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*, Longman
- Widdowson, H. G. (1978) *Teaching Language as Communication*, Oxford Univ. Press

(いおり いさお) 本講座大学院生

【付記】本稿をなすに当たって岩崎卓、日高水穂両氏の御助言に基づいて草稿を書き改めた部分がある。記して感謝致します。